ソロー、〈自然〉を演出する
――『ウォールデン』受容史にみる正典の形成――

増田久美子

1

一九八〇年代より姿を見せ始めたニュー・アメリカニズムは、従来のアメリカ文学史／文学正典を見直し、アメリカそのものを再読するという批評運動であるが、その論客のひとりハワード・ホルヴィッツは、「一九世紀アメリカにおける形式と価値」という視点から自然を分析し、その著書『自然の法によって』のなかで、次のように述べている。「アメリカ合衆国は、もちろん、ジェファソンが述べたように、自然の国家（Nature's nation）であり、自然という表現によって、国家のアイデンティティ、そして多くの場合、個人のアイデンティティを含意する。だが、この帰属意識の意味するものが固定されたことは、一度もない。」(1)

「自然の国家」という言説は、自然とアメリカのあいだに物理的かつ精神的なつながりを歴史的に形づくってきた。アメリカが「国家」となった一七七六年から今日まで、アメリカ合衆国および「アメリカ人」は、この言説を利用することよって自らの存在を証明し、自然とアメリカの関係を繰り返し再定義することによって、自らを規定し続けている。しかし、なぜ、アメリカは、アメリカを論ずるときに自然に帰属するのか。アメリカが「自然の国家」である所以は何か。アメリカのこのような自然への帰属意識について、その起源と発展の過程を追ってみると、トマス・ジェファソン起草の独立革命の宣言書の前文にアメリカ人の「想像の共同体」を喚起する意識（あるいは無意識）の源流が見いだされ、さらに「独立宣言」成立の前には、新世界アメリカに足を踏み入れた人びとの残した旅行記や書簡という先行テクストが存在することが突きとめられる。つまり、一五世紀以降アメリカの自然をめぐる言説は、博物学者や探検家の自然地誌的文脈、植民や共和国建設のための政治的・経済的文脈、さらにはそのような国家建設の企図を合法化・正当化するための法的・宗教的文脈など、さまざまなコンテクストのなかで連綿と続いているのである。そのように表象されてきた自然は、やがて自然という言葉そのものとしてテクストのなかで独り歩きをはじめ、記号と化してしまい、ついには〈自然〉――女性名詞として扱われ、あたかも固有名詞としてふるまう"Nature"――へと変貌を遂げていく。そして、この記号は「アメリカ＝自然」という言説の構造を生みだす母胎となる。この構造こそ、アメリカを国家として、また、アメリカ人を国民として、統一されたアメリカ的自己というものを措定するための、アメリカ神話の骨子となっているイデオロギーなのではないだろうか。

〈自然〉を軸としたそのようなアメリカ神話を解読するために、恰好のテクストとして用いられるのが、ヘンリー・D・ソ

ローの『ウォールデン』(1854) である。今日『ウォールデン』は、アメリカ的自然を表象する「完成された作品」としてみなされ、アメリカ国民に必須の「共有された象徴」あるいは「教養」の一項目として位置づけられ、そして、教育の場でアメリカ文学の正典(キャノン)/規範(ノルム)として読まれている。[2] 読者は『ウォールデン』を通して、「アメリカ=自然」あるいは「自然の国家」アメリカという意識を、無意識に自己のなかへと取り込んでしまっているのである。だが、正典が、いまや「長い年月をかけて自然発生的に形成されるべきもの」という本来の意義を喪失し、「歪みと人為性が加わり、ひとつの社会、文化を相対的に代表するものにはなりえないのではないか」[3]と議論される現在の状況のなかでは、『ウォールデン』がアメリカのアイデンティティを読者に提供するテクストだからといって、この作品が正典の場に安座していることをわたしたちは当然視できない。現代の『ウォールデン』読者がこのテクストのなかに自然という記号を読むとき、それによって「アメリカ=自然」という言説が触発されるという読者経験は、はたして自然なものなのであろうか。それとも、その経験は正典という強大な制度によって操作される人為的なものなのであろうか。それを見るためには、『ウォールデン』出版当時の一九世紀中葉のアメリカ人、すなわちアメリカ人としての自覚を持つ「大衆」に、この作品がどのように受容されたのか、そして、その後の『ウォールデン』は現在にいたるまでどのような変遷をたどったのかを検討しなければならない。『ウォールデン』の受容史を見ることによって明らかになるのは、正典という制度の人為性であり、そして、正典である『ウォールデン』を読む現代のアメリカ人読者の内面に、「アメリカ=自然」という意識/無意識が絶え間なく組み込まれているという意図である。「自然の国家」等の言説を通して、歴史や文化などのさまざまな制度の摩擦のなかから「アメリカ=自然」を生みだしたイデオロギーは、ソロー自身が演出しようとし、また、『ウォールデン』テクストが流通させようとした自然という記号と奇妙にも合致する。

2

一八五四年、『ウォールデン』が出版される。しかし、初稿『原ウォールデン』(A稿) の執筆が終了したのは一八四六年であった。作品の生成過程の研究によれば、この初稿から最終ヴァージョンのG稿にいたるまで、およそ八年におよんで、七回の主要な加筆・書き換え作業が行われたと言われている。[4]『ウォールデン』出版の遅延は、前作『コンコード川とメリマク川の一週間』(1849) (以下『一週間』と記す) の売れ行きがまれにみるほど惨憺たるものだったので、大きなリスクを賭けて新しい作品を請け負ってくれる出版社がなかなか現れなかったためであった。

一九世紀アメリカは、「読書革命」を生みだした資本主義文学市場の時代であった。文学自体が商業の一品目と化した時代のさなかでは、ソローは明らかに売れない作家であった。ソローは『ウォールデン』の語り手「わたし」に重ねられ、痛烈な社会批判者にして改革者、超然とした態度をもつ世間の傍観者または隠遁者として見られることが多い。だが、ソローは決し

て営利目的や世俗的成功、買い手である読者に興味を抱かないような非職業作家ではなかった。「ソローはもっぱら廉価版による大量販売に執心している」という同時代人エマソンの言葉を信用するならば、日々を綴った『日誌』のなかに、『一週間』出版に大失敗をした作家ソローの失意が読みとれよう。[5] 出版が産業となったアメリカのロマン主義時代のなか、ソローはつねに自分の作品の読者を意識し、文学市場の商品生産者となることを余儀なくされたのである。

だが、この『一週間』出版の一件は、ソローにとっては転機であった。彼はそれまで以上に読者を意識し、ライシーアムを通して読者獲得に腐心する。[6] 職業作家として第一歩を踏みだすため、やがては自分の読者となるかもしれない大衆と直接に対峙する場のなかで、とくにソローは『ウォールデン』出版前の一八五一年から一八五二年のレクチャーシーズンのあいだ精力的に講演に奔走する。とりわけ、書き換え作業中であった『ウォールデン』の草稿からの素材を多く扱い、レクチャーの場所によって講演の趣向を変えたり、また、聴衆のタイプによっても講演内容を使い分けるようになった。ソローがライシーアムの講演を通して学んだのは、まさに聴衆（買い手となる読者）を惹きつけるための技術であった。作家という市場の時代の商品生産者にとって、ライシーアムは重要な宣伝の場だったのである。

『ウォールデン』は、ボストンで当時新進のティクナー・アンド・フィールズ社から出版される。出版社側による印刷費用の支払いや、宣伝と書評の手配が積極的に行われ、最初の年は二〇〇〇部数のうち二五六部売れ残っただけであった。前作の失敗に比べれば、ソローの努力は報われたと言うべきかもしれない。だが、その売り上げは同世代の女性作家たちとはとても比較できない数字であった。たしかに『ウォールデン』を「完成するまでに払った代価」を考慮すれば、それは「敗北した作品」と言わざるをえない。[7]

概括するに、ソローの生涯を通しては、彼自身がライシーアムの講演や『ウォールデン』のテクストのなかに蒔いた〈自然〉の種子は世論を形成するにはいたらず、記号の普及という点では、わずかな効果しかもたらすことはできなかった。職業作家としての失敗はソローにますます市場に対する反感を引き起こしたが、文学という商品の生産者として、ソローは市場経済のメカニズムに従属しなければならなかった。南北戦争前夜（アンテベラム）期に勃興した大衆が、小説を好む「大衆」読者層を指すという意味において、ソローの同時代人の多くが『ウォールデン』から〈自然〉を学んだ、ということはなかったのである。

3

『ウォールデン』初版の売り上げは、適度の成功ではあったものの、同時代の文壇の「権威」であったJ・R・ロウエルによって酷評され、大衆のあいだでは、当然H・B・ストウの『アンクルトムの小屋』（1852）に比較できるほどの反響を巻き起こしたわけではなかった。では、一九世紀中葉には『ウォールデン』が「自然の国家」形成の大きな要因となることができなかったのであれば、この作品はどのような過程を経てアメリ

カ正典文学の地位に登りつめ、アメリカ人が国民として共有すべき「教養」事項のひとつになったのであろうか。

ローレンス・ビュエルの論考によれば、ソローがアメリカ文学史のなかにその名を留めるにいたった発端は、商業的な動機と各時代（一九世紀後半、世紀転換期、二〇世紀前半）のイデオロギーがうまく嚙み合った結果であった。[8] 教育関係図書の出版で知られるボストンのホートン・ミフリン社が、その始まりだった。同社は、売り上げが下降気味だったアメリカ人作家による作品群にソローの名を加え、一八八八年初のソロー著作集全一一巻本を刊行する。一八九七年までにはすでに五種類の版の『ウォールデン』があり、一九〇六年には『ソロー全集』マニュスクリプト版が登場、また、出版は無理であろうと思われていた『日誌』も、ここに現れる。「ニューイングランドの六大作家」と呼ばれた精鋭グループに除外されていた二流作家ソローの作品がこうした売り出しに参加し、世紀転換期には正典の地位を勝ち取っていく。実にアイロニカルなことに、ミフリン社が火付け役となってソローの作品を出版しその著者を正典作家へと押し上げたことは、まさに、ソローが『ウォールデン』のなかで猛烈に敵視する「商売」がその後のアメリカ文学史を形成する際に大きく関与し、そして、「エマソンの亜流」からアメリカ文学の主流へと、ひとりの作家の運命を変えたのだった。また、この火付け役には、当時『アトランティック・マンスリー』誌の編集長でありハーヴァード大学教授でもあるブリス・ペリーという後ろ盾がいた。一九世紀の文学形式といえば「詩・散文・劇」であり、「自然詩」は認められても「自然にかんするエッセイ」は文学からは度外視されており、それを文学として確立させたのがペリーであった。[9]

一九世紀末のアメリカ正典文学の規範は、個々のテクストよりも作家そのもの、そして作家の全体的なテーマや文体を重視した。また、作家を個人として存在させるのではなく、「同族グループ」として一括して扱った。たとえば、当時は「ニューイングランドの六大作家」たちが主流であり、その枠に含まれないソローの場合であれば、超越主義というグループのなかに位置づける必要があった。エマソン＝ソロー枢軸を形成して両者の著作を同時に売り出すことが可能となり、殊にミフリン社やペリーにとって、ソローは自然にコミットメントをするアメリカ白人であり、アメリカ最初のネイチャーライターとしてのソローを売り込むことができた。

世紀転換期、ソローのネイチャーライターとしての作家像がますます普遍化する。大学で使用されるテクストとして、そのアンソロジーには、『ウォールデン』からは第四章「音」や第一二章「野生の隣人」など、自然の表象が横溢で、読者に自然志向を勧奨するような章が取りあげられた。自然という記号が徐々にアメリカ人の精神に浸透していったのは、おもに教育を通じてであった。第一次世界大戦の頃までには、三〇種類を越える教科書や文学史のなかでソローは登場し、「ソロー＝自然＝アメリカ」という等号の枠組みができあがっていく。この枠組みこそ「標準的」または「公式」とされたソロー像であり、教育を受ける読者は『ウォールデン』のなかに「アメリカ＝自然」を発見することを義務づけられたのであった。これが、一

九世紀末の正典が示す「穏健派コンセンサス」に基づくソロー像と『ウォールデン』であった。

しかし、一九一〇年代になると、一九世紀末の正典の規準に異を唱える動きが現れる。『アメリカ文学の精神』(1913) を著したジョン・メイシーは、世紀転換期の「穏健派コンセンサス」を「お上品な正典」とみなし、その視座による文学評価と真っ向から対立する。この時期に新たに創られた正典の視点は、同族グループではなく個人の作品の独創性を重視するものであった。メイシーは、ソローの代表的社会批判エッセイ「市民の反抗」(1849) を『ウォールデン』と同等に位置づけ、政治的急進派としてソローの作品を評価し始める。[10]

ミフリン社やペリーの創り出した「自然への愛情を読者と共有する」ソロー像は棄却され、ここに「反抗者ソロー」が誕生したのであった。

一九五〇年代になると、その冷戦構造の状況のなかでは、無政府主義的な主張で始まる「市民の反抗」は一時アメリカの大学の教科書から姿を消した。とはいえ、現代では「ソロー」という名から連想するのは、『ウォールデン』に代表されるネイチャーライター、そして「市民の反抗」に代表される社会改革者の二つの顔が混在した作家である。だが、二〇世紀末の現代、自然環境が世界的問題として議論されるなかで、ふたたびネイチャーライターとしてのソローが大きく取りあげられている。つまり、ソローの評価は、一九世紀後半にアメリカ独特の自然を表象する作家として始まり、一世紀のちの現在にいたって、その出発点のソロー像に回帰したのである。

振り返ってみると、『ウォールデン』における〈自然〉が散布される出発点は、ミフリン社とペリーによるいわゆる「出版者陰謀のセオリー」であり、たしかにそれがソローを正典作家へと引き上げる契機であった。だが、ビュエルは、出版業という営利を目的とする資本主義が絡んだ正典の人為性を実証的に分析しつつも、正典化とは「ある文化が、作家もしくはテクストを、基準となる中心的地位へ押し上げること」[11]だと結論づけ、その「文化」を担うのは誰なのかに言及していない。『ウォールデン』は「文化」によって認められる文学作品ではあるが、「大衆」に広く受容されるテクストではないとすれば、正典を生みだす文化とは、大衆を排除したエリート文化だと言えるだろう。出版者とは、いかに甚大な影響をもって読者の嗜好傾向を制御しようとも、読者層を徹底的に左右することは実際にはできない。ソローの作品は、ソロー本人が辛酸を舐めた一九世紀中葉ほどではないにせよ、やはり市場では売れなかったのであり、現代においても決してその名をベストセラーとして留めることはありえないのである。「大衆」が『ウォールデン』を受け入れないのであれば、では、誰が『ウォールデン』の読者であるのか、つまり、出版からおよそ一世紀以上の年月をかけて、ようやく〈自然〉を見出すという安定した読み方を学習した、現代の読者は誰であろうか。それは、高等教育以上の教育を受けるアメリカ人である。そもそも最初にミフリン社によって出版されたソロー著作集は、教育プロジェクトとして構想されたものであったし、その後ソローや『ウォールデン』が頻繁に登場するようになるのも、つねにアメリカの教育の場との関

わりにおいてであった。アメリカ古典文学の地位を獲得した『ウォールデン』は、教育を通して読者を育成してきたのである。教室のなかで、教科書として『ウォールデン』を義務的に読ませることによって、そのテクストのなかに埋め込まれた〈自然〉を読みとり、アメリカ人読者に「アメリカ＝自然」という概念を喚起させる。そして、アメリカ人の精神のなかに、その概念が深く刻印されるのである。『ウォールデン』を正典として読む理由が、ここにある。

4

『ウォールデン』というテクストが、今日、アメリカの〈自然〉を読み解く鍵となってアメリカ神話を創造し、国民意識を〈自然〉に帰因させるためのイデオロギーと連座しているとは、一九世紀中葉の出版当時、誰が予想したであろうか。

アメリカ的自然あるいは〈自然〉とは、その意味をふたたび確認すると、アメリカという国家および国民の自己アイデンティティを形成するための一手段、つまり文化的構築物である。自然をめぐる歴史的言説が自然というひとつの記号に収斂されることによって、巨大国家アメリカのなかでせめぎ合う多様な人種や階級、ジェンダーなどの差異が覆い隠され、そして、均一的な「アメリカ人」という虚構の国民像が個々のなかに想起する。換言すれば、〈自然〉とは近代国家アメリカを存在させる企ての一部であり、その機能は、とくにテクストが「アメリカは自然の国家である」と宣言するときに著しく見られる。

「アメリカ新大陸発見」の時代以来、アメリカの自然は表象とテクスト化の対象となってきた。テクストの出版と流通によりアメリカ人の自然への関心が高揚し、自然はもはや「自然と文化」という二項対立のなかでとらえられるのではなく、自然そのものがひとつの文化になりえるという可能性のなかで理解されるようになった。ついには、自然はアメリカの特殊文化であると認識されるようになったが、この一見事実にみえる所説さえも、実は、アメリカを「自然の国家」と規定するイデオロギーそのものとして機能している。たしかに、『ウォールデン』は、「自然の国家」アメリカを代表するアメリカの「国民文学」であり、正典文学のひとつであって、わたしは『ウォールデン』の文学的地位を否定するために、テクストの〈自然〉の散布を検証してきたのではない。この作品がアメリカ文学のなかで正当な嫡子的存在である、と誰もが信じて疑わないことに、疑問を投げかけているのである。自然に精通し、かつ社会に対して辛口で誠実な反抗者ソローとその作品がまさに「アメリカ的」であるため、正典への参入条件を十分に満たしているという理由や、ソロー以降の「主流」文学の脈流に〈自然〉を軸とした基盤があるという理由をそのまま鵜呑みにすることは、正典や「文化」の作り手による権威や意思を無批判・無自覚に受け入れることを意味するのではないだろうか。「大衆」――書物を読むリテラシーをもつ、とくに一九世紀における文字通り大勢のアメリカ人――が求めた小説群がアメリカ文学から排除され、実際には広く支持されなかった『ウォールデン』が教育の場で生き残る。このような「主流」と「非主流」の選別作業が行われるのは、やはり、そこにはなんらかの意図がある。ア

メリカ文学という学問制度のなかで、読者はいわば義務として「アメリカ＝自然」を読まなければならない。つまり、読者が『ウォールデン』のなかに「アメリカは自然の国家である」ことを読みとるとき、まさに、このテクストは、自然という記号に立脚したアメリカの自己アイデンティティを生みだそうとするイデオロギーに、巧みに利用されているのである。

(1) Howard Horwitz, *By the Law of Nature: Form and Value in Nineteenth-Century America* (New York: Oxford University Press, 1991), p. 9.

(2) Kristie Hamilton, *America's Sketchbook: The Cultural Life of a Nineteenth-Century Literary Genre* (Ohio University Press, 1998), p. 11. E. D. Hirsch, Jr., *Cultural Literacy: What Every American Needs to Know* (New York: Vintage Books, 1988), pp. xvii, 146-215. 教育の場で『ウォールデン』がどの程度読まれているかについては、Bettina J. Huber, "Today's Literature Classroom: Findings from the MLA's 1990 Survey of Upper-Division Courses," *ADE Bulletin*, no. 101 (Spring 1992) および "What's Being Read in Survey Courses? Findings from a 1990-91 MLA Survey of English Departments," *ADE Bulletin*, no. 110 (Spring 1995) を参照。

(3) 渡辺利雄「アメリカ文学正典見直し――その後」『英語青年』第一三九巻第一〇号（研究社、1994）、p. 494。

(4) Robert Milder, *Reimagining Thoreau* (New York: Cambridge University Press, 1995), p. 52.

(5) Henry David Thoreau, *The Journal of Henry D. Thoreau*, volume 5, Bradford Torrey and Francis H. Allen, eds., (Boston: Houghton Mifflin Company, 1906), p. 459.

(6) ライシーアムというシステムは、一八二〇年代後半からほぼ世紀末までおもにニューイングランド地方各地で流行した一種の成人向け市民教養講習会であり、取りあげられた題目は、趣味的な題材から政治に関する講演、自然科学にいたるまで多様を極めた。

(7) たとえば、スーザン・ウォーナーの『広い、広い世界』(1850) は一年足らずで四万部以上の売り上げを記録し、マリア・カミンズの『点燈夫』(1854) は一年で七万部を越えた。Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace* (Chicago: The University of Chicago Press, 1985), p. 7.

(8) Lawrence Buell, "Henry Thoreau Enters the American Canon," *New Essays on Walden*, Robert F. Sayre, ed. (New York: Cambridge University Press, 1992), pp. 23-52.

(9) Buell, Ibid., pp. 28-29. ブリス・ペリーの文学に対するリベラルな態度については、Ellery Sedgwick, "Bliss Perry: Liberal Humanist in the Progressive Era," *A History of the Atlantic Monthly, 1857-1909: Yankee Humanism at High Tide and Ebb* (Amherst: University of Mas-

sachusetts Press, 1994), pp. 275-317 を参照。

(10) John Macy, *The Spirit of American Literature* (New York : Modern Library, 1913), pp. 183, 172-173.

(11) Buell, op. cit., pp. 35, 48.

[一九九九年十一月一日 受稿
一九九九年十二月三日 受理]

(一橋大学大学院博士課程)